芥川賞全集 十一

芥川賞全集

第十一巻

文藝春秋

芥川賞全集 第十一巻

著者
村上龍
三田誠広
池田満寿夫
宮本輝
高城修三

昭和五十七年十二月二十五日 第一刷

定価 一八〇〇円

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三—二三
電話 (〇三) 二六五—一二一一

本文印刷 理想社印刷所
付物印刷 凸版印刷
製本所 中島製本
製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合はお取替え致します

Printed in Japan

目次

限りなく透明に近いブルー　村上　龍　5
僕って何　三田誠広　91
エーゲ海に捧ぐ　池田満寿夫　183
螢　川　宮本　輝　213
榧(かや)の木祭り　高城修三　263
選評　339
受賞者のことば　373
年譜　379

题　装
字　丁

中　粟
田　屋

功　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芥川賞全集

第十一巻

限りなく透明に近いブルー

村上　龍

（第七十五回　昭和五十一年上半期）

講談社文庫「限りなく透明に近いブルー」（昭和五十二年十二月発行、昭和五十四年二月第六刷発行）を底本とした。

飛行機の音ではなかった。耳の後ろ側を飛んでいた虫の羽音だった。蠅よりも小さな虫は、目の前をしばらく旋回して暗い部屋の隅へと見えなくなった。

天井の電球を反射している白くて丸いテーブルにガラス製の灰皿がある。フィルターに口紅のついた細長い煙草がその中で燃えている。洋梨に似た形をしたワインの瓶がテーブルの端にあり、そのラベルには葡萄を口に頬張り房を手に持った金髪の女の絵が描かれてある。グラスに注がれたワインの表面にも天井の赤い灯りが揺れて映っている。テーブルの足先は毛足の長い絨毯にめり込んで見えない。正面に大きな鏡台がある。その前に座っている女の背中が汗で濡れている。女は足を伸ばし黒のストッキングをクルクルと丸めて抜き取った。

「ちょっと、そこのタオル取ってよ。ピンクのやつ、あるでしょ？」

リリーはそう言って丸めたストッキングをこちらへ投げた。たった今仕事から帰ったばかりだと言って、手にとった化粧水を脂で光っている額に軽く叩きつける。

「それで、その後どうしたの？」

タオルを受け取るとそのまま背中を拭き僕を見て聞いた。

「ああ、酒でも飲ましてね、おとなしくさせようと思ったんだ、あいつの他にも外のセドリックに二人いたしさ、みんなボンドでね、フラフラだったから、酒でも飲ましてさ、あいつ少年刑務所にいたって本当？」

「朝鮮人なのよ、あいつ」

リリーは化粧を落としている。鼻を刺す匂いの液をしみこませた小さな平べったい脱脂綿で顔を拭いている。背中を丸めて鏡を覗き込み、熱帯魚のヒレみたいなつけまつげを取る。捨てられる脱脂綿には赤や黒の汚れがついている。

「ケン、おにいさんを刺したのよ、たぶんおにいさんだと思ったなあ、でも死ななかったんじゃない、この前店に来てたもん」

ワインのグラスに透かして電球を見る。

なだらかなガラス球の中に暗いオレンジ色のフィラメン

トがある。
「リリーに俺のこと聞いてきたって言ってたよ、あまり言うなよ、変な奴にいろいろ言わないでくれよ」
口紅やヘアブラシやその他のいろいろな瓶や箱と一緒に、鏡台の上に置いたワインを飲み干して、リリーは僕の目の前で金ラメのパンタロンを脱いだ。腹にゴムのあとがついている。昔、リリーはモデルをやっていたそうだ。
毛皮のコートを着た写真が額に入れて壁にある。何百万もするチンチラだと教えてくれた。いつか寒い頃にヒロポンを打ちすぎて死人のような青白い顔で僕の部屋に来たことがある。口のまわりに吹出物を作って、ガタガタ震え、ドアを開けるなり倒れ込んできた。
ねえ、マニキュア落としてよ、ベタベタして気持ち悪いの、抱き起こすと確かそういう事を言った。背中の大きくあいたドレスを着ていて、真珠のネックレスがヌルヌルする程全身に汗を掻いていた。除光液なんかなかったのでシンナーで手と足の爪を拭き取ってやると、ごめんね、店でちょっとイヤな事があったのよ、と小さな声で言った。足首を握って爪をこすっている間、リリーは肩で息をしながらずっと窓からの景色を見ていた。僕はドレスの裾から手を入れキスしながら太股の内側の冷たい汗に触れ、パンティを降ろそうとした。パンティを足先にひっかけ、椅子の上で大きく足を拡げたリリーは、あの時テレビが見たいと言いだした。マーロン・ブランドの古いやつやってるはずよ、エリア・カザンのやつ。手の平についた花の匂いのする汗は、長いこと乾かなかった。
「リュウ、あなたジャクソンのハウスでモルヒネ打ったでしょう？　おとといよ」
リリーは冷蔵庫から桃を出してきて皮を剝きながら僕に言う。足を組んでソファに身を沈めている。僕は桃を断わった。
「その時、髪、赤でさ、短いスカートの女、憶えてない？　スタイルいいのよ、お尻が決まってる女、いなかった？」
「どうかな、あの時は日本人の女三人いたなあ、アフロにしてるやつ？」
台所がここから見える。汚れたまま流しに積んでいる皿の上を黒い虫、たぶんゴキブリが這い回っている。リリーは裸の太股にこぼした桃の汁を拭きながら話す。スリッパがぶら下がっている足には赤や青の静脈が走っているのがわかる。僕はその皮膚の上から見える血管をいつもきれいだと思う。
「やっぱりウソついたのね、その女、店さぼったのよ、病

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

気してるやつが昼間からリュウなんかと遊んでりゃ世話ないわ、その女もモルヒネ打ったの？」
「ジャクソンがそんな事する訳ないだろ？　女の子はこういうことしちゃいけないんだって例の調子でさ、もったいないもんだから。あの女リリーのとこの娘かあ、よく笑う女だったなあ、グラス喫いすぎてよく笑ったよ」
「クビにしようかしら、どう思う？」
「でもあの女は人気があるんだろう？」
「まあね、ああいう尻はもてるのよ」
　ゴキブリはケチャップがドロリと溜まった皿に頭を突っ込んで背中が油で濡れている。
　ゴキブリを潰すといろいろな色の液が出るが、今のあいつの腹の中は赤いかも知れない。
　昔、絵具のパレットを這っているやつを殺したら鮮やかな紫色の体液が出た。その時パレットには紫という絵具は出してなかったので小さな腹の中で赤と青が混じったのだろうと僕は思った。
「それでケンはどうしたの？　おとなしく帰ったの？」
「ああ、一応部屋に入れてね、女なんかいないってちゃんと言って、酒飲むか、って言ったらコーラにしてくれってさ、ラリってるから、ゴメンなって謝まったよ」
「バカみたいね」
「車で待ってた連中が通りかかった女をひっかけてさ、あの女はすごく年増だったなあ」
　取り残された化粧がリリーの額で細く光っている。食べ終わった桃の種子を灰皿に捨てて、染めてまとめられた髪からピンを外しブラシで梳かし始める。ゆっくりと髪の波に沿って、斜めに傾けた煙草をくわえたままで。
「ケンのねえさん私の店で働いてたのよ、もうだいぶ前だけど、頭いい人だったなあ」
「もうやめたの？」
「国に帰ったらしいわよ、北の方だって言ってたから」
　柔かな赤い髪がヘアブラシに絡みつく。豊かな髪を整えたリリーは思い出したように立ち上がり、戸棚から銀色の箱に入った細い注射器を取り出した。茶色の小瓶を灯りに透かして液体の量を確かめると、規定分だけ注射器に吸わせて、身を屈めて太股に打った。支えている足がかすかに震えている。針を深く入れすぎたのだろう、抜いた後、膝のあたりまで血の細い線が流れた。リリーは顳顬を揉みながら唇の端から垂れた涎を手で拭う。
「リリー、針は一回ごとにちゃんと消毒しなきゃだめだよ」

リリーは答えずに部屋の隅にあるベッドに横になり、煙草に火をつける。首筋に太い血管が浮き出て弱々しく煙を吐きだす。

「リュウも打つ？　まだあるわよ」

「きょうはいいよ、きょうは俺も持ってるんだ、友達も来るしさ」

リリーはサイドテーブルに手を伸ばし文庫本の「パルムの僧院」を読み始めた。開いたページに煙を吐きかけながら放心した顔で字を追っている。

「よく読めるなあ、変わってるよリリーは」

棚から落ちて床に転がった注射器を拾い上げて僕が言うと、あらあ面白いのよ、と舌が縺れた声で言った。注射器の先端には血が付いていた。洗っておいてやろうと台所に入ると、流しの皿にゴキブリがまだ動いている。僕は新聞を丸めて皿を割らないよう注意し、調理台に移ったゴキブリを叩き殺した。

「何やってるの？」太股の血を爪で剝がしながらリリーが聞く。

「ねえ、こっちおいでよ」

とても甘い声だ。

ゴキブリの腹からは黄色い体液が出た。調理台の縁に潰れてこびりつき、触角はまだかすかに動いている。

リリーはパンティを足から抜いてもう一度僕を呼んだ。絨毯の上に「パルムの僧院」が投げ捨ててある。

僕の部屋は酸っぱい匂いで充ちている。テーブルの上にいつ切ったのか思い出せないパイナップルがあって、匂いはそこから出ていた。

切り口が黒ずんで完全に腐れ、皿にはドロドロした汁が溜まっている。

ヘロインを打つ準備をしているオキナワは、鼻の頭にびっしりと汗を掻いている。それを見て、リリーが言った通り本当に蒸し暑い夜だと思った。湿ったベッドの上で重くなっているはずの体を揺すりながら、ねえ暑くない？　きょうとても暑いわ、リリーはそう言い続けた。

「ねえリュウ、このヘロインいくらした？」

ドアーズのレコードを革のバッグから取り出しながらレイ子が聞く。十ドルだと答えると、へえ、沖縄より安いや、とオキナワが大声をあげた。オキナワは注射針の先端をライターで炙っている。アルコールで湿した脱脂綿で拭いて消毒してから息を吹き入れ穴が詰まっていないかテストす

る。
「壁やトイレなんかがきれいになってたんでびっくりしたよ、四谷署だけどな、最近新しくなったんだなあ、あれは、若い看守の野郎がおしゃべりな奴でさ、ここは警察の独身寮よりいいよなんて詰まらない冗談言いやがって、おべんちゃらでバカ笑いするじじいもいてな、全く気分悪かったな俺は」
　オキナワの目は黄色く濁っている。牛乳瓶に入った変な匂いの酒を飲んで、この部屋に来た時はすでにかなり酔っていた。
「おい、向こうで保健所にいたって本当か？」
　ヘロインを包むアルミ箔を開きながら僕はオキナワに聞いた。
「ああ、オヤジになる、入れられたんだ、アメちゃんの保健所だよ、俺がばくられたのはMPだったからさ、まず米軍の施設で直してからあ、こっちに送り返されることになったわけだな、リュウ、やっぱりアメリカって国は進んでるよ、俺ホントにそう思ったぜ」
　ドアーズのレコードジャケットを見ていたレイ子が横から口をはさむ。
「ねえリュウ、毎日モルヒネ打ってもらえるんだってよ、いいと思わない？　レイ子もアメちゃんの保健所入りたいなあ」
　アルミ箔の隅のヘロインを耳掻きで中央に集めながらオキナワは言う。
「バカ野郎、レイ子みたいなハンチクなやつは入れないよ、本当のジャンキーしかダメなんだって言ったろ？　俺みたいなさ、両腕に注射胼胝（だこ）ができてる本物の中毒者しか入れないさ、ヨシ子さんってちょっと色っぽい看護婦がいてな、俺その人から尻に毎日打ってもらったよ。尻こう突き出してさ、窓からみんながバレーボールかなんかやってるの見ながらプスリと尻にね、からだがもう弱ってるもんだからちんちんが縮んじゃってるだろ？　ヨシ子さんに見せるの恥ずかしかったなあ、レイ子みたいにでかい尻だときっとだめだな」
　レイ子はでかい尻と言ったオキナワにフンと小さく文句を言って、飲み物が欲しい、と台所に行き冷蔵庫を開ける。
「ねえ、何もないのお？」
　オキナワがテーブルのパイナップルを指差し、これ少しもらえよ、故郷の味だろ？　と言う。
「オキナワ、あんたってホントに腐れてるものが好きねえ、何よその服、匂うわよ」

カルピスを水で薄めて飲みながらレイ子は言う。氷を頬に入れて動かしながら。
「レイ子ももうすぐ絶対にジャンキーになるんだ、オキナワと同じくらいの中毒になっとかないと結婚してから疲れると思うのよ、そして二人共中毒者になってからあ一緒に住んでさ、少しずつ止めるようにしたいな」
「二人して保健所へハネムーンか？」
笑いながら僕が聞く。
「うん、ね？　オキナワ、そうするのよね？」
「そりゃいいよ、そうしろよ、二人で仲良くお尻並べてモルヒネ打ってもらえよ、愛してる、なんて言い合ってさ」
オキナワは、ちゃかすなよ、バカ野郎、と少し笑い、熱湯に浸してあった大きいスプーンをナプキンで拭いて乾かす。把手が弓形に大きく曲がったステンレスのスプーンの中に、マッチ棒の頭くらいの量だけ耳掻きでヘロインを入れる。レイ子今くしゃみなんかしたらぶっ殺すからな。スポイトで吸い上げる戦場用の一ＣＣ注射器に針を塡める。レイ子が蠟燭に火をつけた。注射器で、スプーンの中のヘロインに注意深く水滴を垂らす。
「リュウ、お前またパーティーやるのか？」
少し震える指をズボンに擦りつけて落ちつかせながらオキナワが聞いた。
「ああ黒人に頼まれたからな」
「レイ子、行くんだろ？　パーティーにさ」
残りのヘロインをまたアルミ箔に包み直すレイ子にオキナワは聞く。レイ子は僕の方を見ながら、うん、だけど心配ないよ、と答えた。
「ラリって黒人なんかと寝たら承知しないぞ」
スプーンを蠟燭に翳す。あっという間に水溶液は沸騰する。スプーンは内側に泡と湯気をたて、底は黒い煤で汚れる。オキナワはゆっくりと火から離し、赤ん坊にスープを飲ませる時のように息を吹きかけて冷ます。
留置場でさあ、と脱脂綿をちぎりながら僕に話しかける。
「留置場でさあ、ずっと切れてただろ？　恐い夢見ちゃってなあ、もう思い出せないけど俺の一番上の兄貴が出てきたんだよ、俺は四男だから、兄貴は知らないんだ。兄貴はオロクで戦死したからな、会ったことないんだけど、兄貴の写真もなくて仏壇に親父の描いた下手な絵があるだけなんだけどさ、その兄貴が夢に出てきたんだ、不思議だろ？　変だよな」
「それで兄貴が何かしゃべったの？」
「いやそういうのはもう忘れたけどさ」

小さくちぎった親指の爪程の脱脂綿をさめた液に浸す。オキナワは湿って重くなった脱脂綿の中に針先を沈めた。かすかな音を出して、ちょうど赤ん坊が乳を吸うような音で透明な液体が細いガラス管に少しずつ溜まっていく。吸い終わると唇を舌で舐めながら、オキナワは少しだけスポイトを押し、注射器内の空気を抜く。

「ねえ、レイ子にやらせてよ、リュウに打ってあげるよ、沖縄じゃみんなに打ってやってたんだからさ」

腕をまくったレイ子が言った。

「だめだ、お前いつか失敗して百ドル、パーにしやがったくせに、ピクニックの握り飯作るみたいに浮き浮きするんじゃないよ、みっともない、ほら、リュウの腕それで縛ってくれ」

レイ子は口を尖らせてオキナワを睨み皮紐で僕の左腕をきつく絞り上げた。左拳を握りしめると太い血管が浮き出る。アルコールで二、三度擦るとオキナワは濡れている針先を脹れた血管目がけて皮膚に沈めた。握りしめていた拳を開くとシリンダー内に黒っぽい僕の血が逆流してくる。ほらほらほら、と言いながらオキナワはスポイトを静かに押し、血と混じり合ったヘロインを一気に僕の中に入れた。

一丁上がりでっせえ、どうでっか？　オキナワは笑って針を抜く。皮膚が震えて針が離れた瞬間、もうヘロインは指の先まで駆け巡り、鈍い衝撃が心臓に伝わってきた。視界に白い霧のようなものがかかりオキナワの顔がよく見えない。僕は胸を押さえて立ち上がった。息を吸いたいが呼吸のリズムが変わっていてうまくできない。殴られたように頭が痺れていて口の中が焼ける程乾いている。レイ子が僕の右肩を抱き、支えようとする。カラカラになった歯茎から少しだけ滲み出た唾液を呑み込むと、足先から駆け昇るように吐気が込み上げて、呻きながらベッドに倒れた。

レイ子が心配そうに肩を揺すっている。

「ねえ、ちょっと多すぎたんじゃない？　リュウ、あまりやったことないんだもん、見て、顔真青よ、大丈夫かなあ」

「そんなに打ってないぞ、死ぬことはないだろ、まあ死ぬことはないさ、レイ子、洗面器持ってきとけよ、こいつきっと吐くぞ」

枕に顔を埋める。喉の奥は乾いているのにひっきりなしに唾液が唇から溢れ、それを舌ですくうたびに猛烈な吐気が下腹を襲ってくる。

思いきり息をしてもほんの少ししか空気は入ってこない。それも口や鼻からではなく胸に小さな穴があってそこから

漏れ込むような感じだ。腰は動けない程痺れている。締めつけられるような痛みが時々心臓を刺す。顳顬で脹れた血管が思い出すようにヒクヒクと震える。目を閉じるとものすごいスピードで生暖い渦の中に引き込まれるような恐怖を感じる。からだ中をヌルヌルと愛撫されていて、ハンバーグに乗せられたチーズみたいに溶けていくようだ。試験管の中の水と油塊のように、からだの中で冷えきっている部分と熱をもったところが分離して動き回っている。頭や喉や心臓や性器の中で熱が移動している。

レイ子を呼ぼうと思っても喉が引き攣れて声が出ない。煙草が欲しいとさっきから思っている。そのためにレイ子を呼びたいが口を開いてもかすかに声帯が震えてヒィーというかすれた音がするばかりだ。オキナワ達がいる方から時計の音が聞こえる。その規則正しい音は妙に優しく耳に響く。目はほとんど見えない。乱反射している水面みたいな視界の右の方に痛く感じる眩しい揺らめきがある。

きっとあれは蠟燭だと思っていると、レイ子が顔を覗き込み、手首を取って脈拍を確かめて、死んでないよ、とオキナワに言った。

僕は必死で口を動かす。鉄のように重い腕を上げてレイ子の肩に触れ、煙草をくれ、と小さな声を出した。レイ子は火の付いた煙草を唾液で濡れている唇にくわえさせ、オキナワの方を向いて言う。ちょっと見てよ、このリュウの目、ガキみたいに恐がってさ、震えてるよ、可哀そうに、あらあら涙まで出しちゃって。

煙は生き物のように肺の壁を引っ掻く。オキナワが僕の顎に手をかけ顔を起こして瞳孔を調べ、こりゃあ危なかったなあ、こりゃあすげえや、リュウの体重があと十キロ少なかったらもうだめだったな、とレイ子に言う。夏、砂浜に寝そべってナイロンのビーチパラソルを通して見る太陽みたいにオキナワの顔は輪郭がぼけて歪んで見える。自分が植物になってしまったように感じる。それも灰色に近い葉を日陰で閉じて、花も付けず柔かい毛に包まれた胞子をただ風に飛ばす羊歯のような静かな植物に。

灯りが消えた。オキナワとレイ子が服を脱ぎ合う音が聞こえる。レコードの音量が上がった。ドアーズのソフトパレード、その合間に擦れ合う絨毯の音とレイ子の押し殺した呻き声が耳に入ってくる。

ビルの屋上から飛び降りる女が頭に浮かんできた。顔は恐怖に歪んで遠去かる空を見ている、手と足を泳ぐ時のように動かしてもう一度上へ上がりたいと蹶いている。結んでいた髪は途中で解け水藻のように頭の上で揺れている、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com